

「友達のジャガイモ」

ある小学校の一年生が「『同じ』と『違う』について考えよう」というテーマで、体験的な学習を行いました。

担任が一人に一個ずつジャガイモを配ります。子どもたちは「何が始まるんだろう」という表情です。担任がめあてを提示した後、「みなさん、目の前のジャガイモと友達になりましょう。なれますか?」と問います。「なれる!」「もう、なれた!」この辺りはさすが一年生。友達になるための方法は自分で考えることにします。「似顔絵」と称してジャガイモをスケッチしている子がいます。友達だから「名前」を付けている子もいます。「ざらざらする」と触ってみたり、「土のにおいがする」とにおいをかいてみたり、「ここ、けがをしている」と傷を見つけたりしています。ジャガイモと触れ合った後「なかよくなれましたか?」と尋ねると、「なれました!」という声。

「では、ジャガイモたちに集合してもらいます」と言って、ダンボールに全てのジャガイモを戻し、尋ねます。「みなさん、この中から、自分の友達のジャガイモをすぐに見つかりますか?」子どもたちは「見つけれられる!」と自信満々です。実際探してみると、あっという間に見つけていきます。「この色が…」「ここがへこんでいるから」「コロンくんだ」など、ロ々に特徴をつぶやいています。全員が無事見つけ、感じたことの発表や担任とのやりとりを行いました。振り返りでは「同じジャガイモでも、よく見たら全部違うことが分かった」「友達になるためには、よく見ないといけないと分かった」などの発言がありました。

参観していて「ジャガイモという点では同じ、でも、よく見れば全部違う。よく見るためには『思い込み』で見るのではなく『事実』を見ることが大切。一年生ではそうした結論や事実を教え込むより、発達段階を踏まえ、子ども自身が気づき、感じ、考えていく学習が大切だ」と学びました。